

〔研究ノート〕

戦後上海における俸給生活者層の 社会・文化活動

岩 間 一 弘

はじめに

フランスの社会学者P・ブルデューが、「趣味」と「階級」の関係に着目し、「趣味」の領域においても自らを他の「階級」と区別して卓越化しようとする戦略が働いていることを明らかにしたのはよく知られている⁽¹⁾。ここでは次の2点について確認しておきたい。すなわち、ある階層への帰属意識は、生産現場（＝職場）からばかりではなく、消費過程においても生成されていること、そして、確かに消費者は生産者よりも政治的に組織化されることが少ないとはいえるものの、やはり個々の局面のなかに断片化された権力関係や権力闘争とは無関係に生活できないということである。

こうした観点から筆者は娯楽や余暇に注目しつつ、まず、戦前期の上海における新たな階層の形成過程を跡づけた。中国資本の工場・銀行・大型商店が増加・成長した両大戦間期の上海では、資本家や労働者の他にも、精神・頭脳労働に従事する俸給生活者が活躍の場を広げた。俸給生活者たちのなかには、私塾などで学び旧来の地場商業・産業での職歴を生かして新式の企業・機関に転職した者もいた一方で、しだいに中等・高等水準の学校教育を受けた後で大組織に雇われて管理・事務・会

(1) Pierre Bourdieu, *La distinction: critique sociale du jugement*, Editions de Minuit, Paris, 1979. 石井洋二郎訳『ディスタンクシオン—社会的判断力批判』, 新評論, 1989年, 藤原書店, 1980年。

計・販売等の職務についた者が増加した⁽²⁾。俸給生活者の新たな経歴はその余暇にも反映され、彼（彼女）らは趣味として読書、スポーツ、音楽、映画・演劇鑑賞などを挙げる場合が多かった。それらは、学校教育を受けて頭脳・精神労働に従事する者が十分に楽しめ、さらに彼らの教養や社会的地位にふさわしい「正当な娯楽」といえたのである⁽³⁾。

次に筆者は、戦時下の都市における地域秩序の生成に新中間層がどのように関わったのかを考察した。上海では1930年代後半から聯誼会という社会団体が数多く設立され、広範な俸給生活者層を組織化し始めた。聯誼会の提唱する「正当な娯楽」は、個人の知識や道徳を向上させ、俸給生活者層の心を繋いで連帯感を形成し、都市地域社会において「慈善救済」の役割を担い、民族・国家に貢献して「富国」「救国」ないしは「抗日」「革命」に役立つことが求められた。聯誼会に集まった俸給生活者たちの社会・文化活動は、重慶国民政府の新生活運動や国民精神総動員運動と歩調を合わせて進められたばかりではなく、共産党の影響拡大のためにも利用された。1941年12月に日本軍が共同租界に進駐した後も、聯誼会は汪政権の当局に登録を行い、汪政権下で要職に就いた人の庇護によって活動を続けた⁽⁴⁾。

さて以上の論考の続編である本稿でも、銀行や錢莊の従業員が組織した上海市銀錢業聯誼会（以下では「銀聯」と略す）、外資系企業の職員が組織した「華聯同樂会」（以下では「華聯」）、保険業の職員などが組織した上海市保険業業余聯誼会（以下では「保聯」）、商店員やその他の中国資本系企業の職員が組織した益友社を取り上げる。そして終戦後の各聯誼会の活動を見ながら、日本軍とその傀儡政権という共通の敵を失った新しい状況において、国民党と共産党が俸給生活者層の余暇活動をどのように掌握しようとしたのかを考察したい。これらの4つの代表的な民

(2) 拙稿「両大戦間期の上海における商業教育の展開と新中間層形成」、『中国—社会と文化』第18号、2003年6月。

(3) 拙稿「20世紀上海の新中間層に関する歴史的研究—企業職員履歴書の分析」、富士ゼロックス小林節太郎記念基金小林フェローシップ2003年度研究助成論文、非売品、2005年8月。

(4) 拙稿「戦時上海の聯誼会—娯楽に見る俸給生活者層の組織化と市民性」、高綱博文編『戦時上海 1937～45年』、研文出版、2005年、197～230頁。

間企業職員の親睦団体については、1980年代後半から90年代初頭に、往年の活動家たちが中国共産党の上海市委党史史料徴集委員会に集まって史料集を編纂した⁽⁵⁾。

5冊の史料集は、戦時上海において共産党の地下党員であった人たちが中心になって、共産党史ないしは労働運動史の史料集として編纂したものであり、独特の語り口、誇張された表現、記憶違いによる誤記などが散見される。とはいえ、聯誼会に関しては史料的な制約が大きく、各聯誼会の機関誌の記事とできるかぎり照合しながら⁽⁶⁾、共産党上海市委が編纂した史料集を主要史料にして検討するしかない。そこで本稿はまず、戦後上海の聯誼会に加わった俸給生活者たちの社会・文化活動を主に史料集に依拠して素描し、さらにそれによって明らかになる俸給生活者たちの戦後史像の問題点を考察したい。

一、国民党の聯誼会に対する統制

1936年10月、新設された銀聯と洋聯は、共同租界内の漢口路を会所にしたが、そこは間もなく共同租界工部局の取り締まりをうけて閉鎖され、フランス租界のジョッフル路（現在の淮海中路）に移転した。1937年11月、国民政府軍が3ヶ月の激戦を経て上海地域から全面撤退すると、租界地区は周囲を日本軍の占領地区に囲まれる「孤島」となった。その後、両租界の当局は、日本軍からの圧力を受けて、租界内の抗日団体と抗日活動の取り締まりを強化した。銀聯と洋聯は、フランス租界公董局の取り締まりをうけて共同租界に舞い戻った⁽⁷⁾。このように銀聯と洋聯は、共同租界とフランス租界を転々とすることで、活発な活動を継続した。その生き残り戦略は、中国共産党江蘇省委員会の言葉を借用すれば、「英、米、フランスと日本の

(5) 中共上海市委党史史料徴集委員会主編『益友社十二年（1938—1949）』1985年8月，同主編『上海“銀聯”十三年（1936—1949）』1986年8月，同主編『上海市保険業職工運動史料（1938—1949）』1987年12月，同主編『上海市保険業職工運動史料（続編）（1938—1949）』1989年6月，同主編『華聯同楽会与上海外商企業職工運動簡史（1938—1949）』1991年7月。

(6) 当時の各聯誼会の機関誌には、『銀錢報』（1937年12月～1950年11月），『銀錢界』（1938年11月～1940年12月），『華聯』（1938年6月～1947年1月），『保聯』（1938年11月～1939年11月），『保険月刊』（1940年1月～1941年8月），『益友』（1938年5月～1941年11月）などがあったが、上海図書館・上海市档案馆・上海歴史博物館・（中国人民銀行）銀行博物館などに現存するのはごく一部の号数に限られる。

(7) 『華聯同楽会与上海外商企業職工運動簡史』，20～22頁。

間の矛盾を利用し、幾つかの工作のなかで、できる限り租界当局や個々の分子との合作を勝ち取るべきである」⁽⁸⁾としたものであった。すなわち、それは多元的な統治権力と行政系統が並存した上海地域においてこそ可能である巧妙な戦略であった。

1941年12月8日、日本軍は英米両国との開戦に伴って、共同租界に進駐し全区域を占拠したが、「敵国人」の除去や「敵国資産」の管理などの任務を終えると撤退し、共同租界内の治安警備は工部局警察に任された。また、フランスは1940年6月にドイツに降伏し、その後フランス租界公董局が日本軍に対して協調的態度をとったこともあって、フランス租界は当初から日本軍の進駐の対象外であった⁽⁹⁾。それゆえ、複数の統治権力の狭間に存在していた比較的自由に団体を結成して活動できる空間は、太平洋戦争勃発後もこうして辛うじてわずかに保たれた。しかし1943年1月9日、汪精衛政権は英米に宣戦を布告すると同時に「日華共同宣言」および「租界還付及治外法権撤廃等に関する日本国中華民国間協定」に調印し、11日には、重慶の国民政府と英米政府が「在華治外法権及びその関連特権取り消し」に関する新条約に調印した。これらに呼応してフランスのヴィシー政府も、2月23日、不平等条約に基づくフランスの中国における特権の放棄を公式に宣言した。そして実際には、7月31日にフランス租界、8月1日に共同租界がそれぞれ南京の汪精衛政権に返還された⁽¹⁰⁾。それまで上海の各聯誼会と俸給生活者たちの活発な活動を可能にしていた多元的な統治権力と行政系統、ならびに租界の安全性はこの時点で失われ、

(8) 同前、23頁。

(9) 高綱博文「日本占領下における「国際都市」上海—日本の上海外国人政策と外国人居留民状況」、同編『戦時上海 1937～45年』、29～65頁。

(10) 1943年のフランス租界返還は、ヴィシー政府・汪精衛政権の両傀儡政権がおこなったものなので、終戦後に仏・中の両新政府は再交渉し、1946年2月28日、フランス政府は中国軍のインドシナ北部からの撤兵を交換条件として、上海のフランス租界や中国での治外法権の放棄を認めた。フランス租界の返還については、Christine Cornet, "The Bumpy End of the French Concession and French Influence in Shanghai, 1937-1946," in Christian Henriot and Wen-Hsin Yeh (eds.), *In the Shadow of the Rising Sun: Shanghai under Japanese Occupation*, Cambridge, Cambridge University Press, 2004, pp.257-276. また戦時の共同租界におけるイギリス人の動態については、Robert Bickers, "Settlers and Diplomats: The End of British Hegemony in the International Settlement, 1937-1945," in Henriot and Yeh (eds.), *In the Shadow of the Rising Sun*, pp.229-256. に詳しい。

終戦後にも再現されることはなかったのである⁽¹¹⁾。

1945年8月、日本が連合国に無条件降伏を通告すると、重慶の国民政府軍が米軍機を使って上海に入り、市内各施設の接收を始めた。戦時に傀儡政権の統治下にあった両租界地区は日本軍の降伏後に国民政府の統治下に入り、戦後の国民政府は上海地域における一元的な社会統合が可能になっていた。終戦後、多くの聯誼会が活発な活動を再開したが、戦後の国民党政権は、戦前の国民党政権や戦時の傀儡政権と比べて、聯誼会の活動により強く干渉することが多かった。戦後の国民党は、戦前の国民党や戦時の傀儡政権よりも積極的に党員を聯誼会に送り込み、聯誼会を利用して上海の企業職員たちを管理しようとした。

上海において国民党にもっとも強い干渉を受けた聯誼会は、保聯であった。戦後の上海では保険会社の増資や新設が相次ぎ、さらに重慶などの国民党統治区から政府系・民間資本系の保険会社が移転し、欧米資本系の保険会社も戻ってきた。そのため、保険会社の数は占領期の約100社から約300社まで増加し、保険業の従業員も4000人を超え、業界は活況を呈した。こうした戦後上海の保険業界で権勢をふるったのは、国民党員で中央信託局人寿保険処經理・中国再保険公司董事長の羅北辰であった。1945年8月、羅は重慶から上海にやって来ると、国民党上海市金融特別党部常務委員に着任し、まずは上海市保険業同業公会の理事長の座を狙って、上海保険業界の有力者を牽制した。例えば、太平保険会社の總經理になった丁雪農に対しては、日本軍占領下の上海にいたために「日偽と私通した嫌疑」があり、同業公会の責任者にはなれないと脅した。また、中国保険公司董事長の宋漢章に対しては、羅北辰とは地位が釣り合いなので、羅北辰は落選しても問題ないが、宋漢章が落選したら名声に影響が出るなどといって圧力をかけた。丁雪農や宋漢章を始めとする上海保険業界の有力者が政争に巻き込まれるのを避けたために、羅北辰は上海市保険業同業公会の理事長の座を勝ち取り、続いて全国保険商業同業公会聯合会の理事長にも就任した。

上海市保険業同業公会の理事長となった羅北辰は、保聯の活動に着目してその指

(11) 以上からわかるように、1941年12月の時点で「自由な政治・社会活動を可能にしていた多元的な統治権力と行政系統、ならびに租界の安全性」が「完全に失われ」というのは正確ではなく、ここで拙稿「戦時上海の聯誼会」、210頁、2～4行目の記述を訂正したい。

導者に接近した。1945年8月から10月にかけて重慶で国・共両党の会議が開催され、民主運動が高揚すると、羅北辰は孫科立法院院長の長・短所を論じるなどして、自らが民主的な人物であることを標榜したのと同時に、保聯の指導者に対して配慮や支持を表明していた。しかしその後、羅北辰はしだいに保聯への統制を強めていった。まず羅北辰は、保聯の秘書処で働く共産党地下党員の沈潤璋と趙偉民に働きかけ、社会局への登記を促し、羅の支持があれば受理されると説得した。他方で羅北辰は社会局を通じて、沈潤璋・趙偉民の勤める企業に彼らの「政治背景」を調べるように働きかけた。1946年秋、保聯は登記の申請を受理されたが、その際には従来の「上海市保険業業余聯誼会」の名称が、「上海市保険界同仁進修会」（以下では「保進」）に改称された。羅北辰は、保進の理事長の座を狙い、ほかの上層人士を脅すなどして、保進の問題で羅北辰と正面衝突しないように仕向けた。

羅北辰は保進の理事長に就任すると、会のいかなる出費にも羅北辰の署名押印のある小切手を必要とさせて、重要な会務をすべて管理した。羅北辰は、一部の理事を攻撃して理事会に出席できなくしたり、辞職させたりする一方で、国民党三民主義青年団の団員で元青年軍士官の穆道政を招いて保進の幹事兼図書館管理員とし、保進の日常活動を監視させた。ほかにも、羅北辰は保進の各種活動を制限し、例えば、保聯の会報は出版を停止され、機関誌『保険月刊』（1938年1月から39年12月は『保聯』、40年1月に『保険月刊』に改称し41年8月に停刊）の復刊は認められなかった。また、保聯は終戦直後から1946年4月にかけて、郭沫若（文化人、1927年に共産党入党）・黄炎培（教育家、民主建国会の創設者）・陶行知（教育家、平民教育促進会の創設者）・馬寅初（経済学者、民主同盟に参与）・沙千里（法曹家、38年に共産党入党）・馬叙倫（教育家、民主促進会の発起人）・章乃器・沈鈞儒（法曹家、民主同盟に参与）・茅盾（作家、21年に共産党入党）・胡子嬰（女性の活動家、民主建国会に参与）・呉晗（歴史学者、民主同盟に参与）といった左派系・民主党派系の著名人を招いて、時事・政治経済に関する講演会を開催し、毎回200～400人程度の聴衆を集めていた。しかし、羅北辰が保進の理事長になってからは、講演会を禁止した。さらに羅北辰は、最終的に保進を保険業同業公会と合併し、同業公会の附属組織にして管理を強化しようとした。

国民党による統制が強まるなか、保聯・保進の共産党地下党員は窮地に追い込ま

れた。共産党華東聯絡部の施月珍は、保聯の活動状況を上司の張蓮航に逐一報告していたが、張は共産党を裏切って華東連絡部を破壊し、国民党の特務機関である中統局の上海辦事所に保聯の活動と地下党員の状況を密告した。その結果、1947年3月には施月珍が逮捕され、ほかの共産党地下党員も危険にさらされた。1948年8月の段階で、保険業界で活動する共産党員は52名を数えた。1948年末、羅北辰は保進の会所を閉鎖し、中統は保険業界で活動する4名の共産党地下党員を逮捕した。共産党はそれ以上の損害を防ぐため、保険業界で活動していた党員のうち6名を除いて、残りの党員を保進以外の工作に移すか、上海から遠ざけて蘇北の共産党統治区に移した⁽¹²⁾。このように保進は、国民党員と共産党地下党員が活動の主導権を争い、国民党の社会統制と共産党の大衆運動が衝突する場になっていたのである。

さて、保聯・保進とともに国民党の統制を強く受けたのは、華聯であった。終戦後、華聯の主席と副主席には、国民党員の趙懷仁と錢齊靈が就任し、そのほかにも華聯の上層部には、国民党員や三民主義青年団員が数多くついていた。趙懷仁や錢齊靈を始めとする国民党員は、華聯を国民党寄りの社会団体にして、外資系企業の職員の中に国民党の影響力を増大させようとしたため、華聯内部の非国民党系人士との間で軋轢が生じることがあった。例えば、華聯は戦時に賃貸ししていた講堂を、終戦後に回収して会の活動に利用しようとしたが、借り手との間で折り合いがつかず、趙懷仁と錢齊靈が「敵産の徴用」という名目で回収を強行した。ところが華聯の国民党員は、それに便乗して華聯の入口に「国民党上海市直属第十三区分部」という看板を掲げた。この措置に対して、華聯の非国民党系人士は、「章程」第39条の「本会は如何なる政治活動や一切の不良な娯楽を絶対に禁止する」という条文を根拠として、その看板を撤去した。ほかにも、趙懷仁や錢齊靈らは、国民党上海市党部の方治や呉開先らを華聯に招いて講演をさせようとしたが、非国民党系の有力人士が反対して実現しなかった。またそれとは逆に、非国民党系の人士が沙千里を講演に招こうとすると、華聯の国民党員が沙千里の拉致計画を公言したが、沙千里の講演会は無事に遂行された。

1947年春に展開された会員徴集運動において、華聯主席の国民党員・趙懷仁は、党の意向を受けて、国民党C・C系の駱清華を運動大会の名誉会長に就任させるこ

(12) 『上海市保険業職工運動史料』, 34, 39, 45～49, 88～89頁。

とを提起し、運動終了後に駱清華を華聯の主席に就かせようとしたが、非国民党系の華聯有力者の反対にあって実現しなかった。結局、華聯の主席・副主席には国民党員の趙懷仁・錢齊靈が再選され、ほかにも理事には、国民党C・C系の駱清華、戦時に華聯の主席を務めた盧馥，共産党地下党員の陳已生らが選ばれた。選挙終了後には国民党系の会員が、誰は共産党で誰は民主同盟であるといった、名指しの流言を飛ばして一時的に混乱を引き起こした。しかし同年10月には、華聯同楽会の会所再建の経費を募金する委員会が組織され、趙懷仁と張岳卿（詳細不明）が総幹事、俞佐庭（四明銀行総経理）が名誉会長、李文杰が総隊長、烏崖琴（寧波同郷会総幹事）が参謀長を務め、徐寄廬（戦後に上海市商会理事長に就任）、劉靖基（上海の安達紡績廠総経理）、徐学禹（国営招商局経理）、嚴諤声（上海商業日報社社長）らの業界有力者から、合計で法幣25億元の寄付金を集めることに成功した⁽¹³⁾。

ところで、銀聯は戦前・戦時に名誉理事や理事を務めた人士が、戦後にも継続して会の運営に尽力したので、国民党による直接的な統制を、保聯や華聯の場合ほどは強くうけなかった。とはいえ、戦後の銀聯は、国民党に対して以前よりも慎重な配慮を示しながら会を運営した。日本の降伏から間もない1945年9月、銀聯は国民党上海市党部に登記を申請し、翌年3月、「上海市銀錢業同人聯誼会」に改称して、市党部への登記が認められた。その代わりに、国民党上海市党部は2名の専門員を「指導」のために銀聯に派遣した。

1946年6月、銀聯の会員代表大会が開催され、王志莘（江蘇農業銀行総経理等）、孫瑞璜（新華信託儲蓄銀行副総経理等）、陳滋堂（当時は浙江建業銀行董事長に就任）といった、戦前・戦時期に銀聯で名誉理事や理事を務めた有力者たちが常務理事に就任し、実際に会を運営することになった。戦後に銀聯は名誉理事の職位を廃止し、裴雲卿（中国墾業銀行総経理・銀錢業聯合会副主席等）、錢新之（交通銀行常務董事等）、魏友棐（福源錢莊襄理等）、李馥蓀（浙江実業銀行総経理等）といった有力金融業者や傀儡政権下で要職に就いた朱博泉らは、銀聯の職位から退いた。そして、日本の占領期に銀聯の理事長を務めた陳滋堂は、社会的地位から見て理事長に再選されない恐れがあったため、孫瑞璜が、海外から帰国したばかりの王志莘を推挙して理事長への就任を要請した。王志莘は、私商人を廃して国家が富の分配

(13) 『華聯同楽会与上海外商企業職工運動簡史』，44～52頁。

を担ってもよいとする「合作主義」を主張し⁽¹⁴⁾、後に共産党政権下でも要職に就く左派系の銀行家であったが、それにも関わらず、戦後に銀聯の理事長に就任するにあたっては、次の3つを条件として提示した。すなわち、①銀聯の重要な活動は国民党上海市党部などの関係方面に報告する、②中央銀行などの大企業内の国民党员を銀聯に参加させる、③銀聯は労働組合と見なされないために、各銀行・錢莊の内部行政に干渉しない、の3点である。さらに王志莘は、潘世杰・李軻哉といった国民党の上層人士を、銀聯の委員会の主任に就任させた。こうした運営方針は、占領期に益友社などの一部の聯誼会が傀儡政権で要職に就いた人士を理事会に招き入れたのと同じ手法であり、会の活動に政治的な正当性を付与することを目指したものであった。

こうして戦後には王志莘と孫瑞璜が継続して銀聯の理事長と副理事長を務め、上海の各層銀行員を組織化し、銀行員の社会的・政治的な影響力を保とうとした。他方、1946年6月、銀行員の王良玉らが、銀聯とは別に、上層人士を会員に含まない労働組合的な性格の強い上海市銀行従業員協会（以下では「銀協」）を発起しようとして、上海市政府社会局に登録を申請した。そのため、同時期に社会局に登録を申請中であった銀聯は、銀行員が別の団体の組織を計画していることを口実にされて、登録を許されなかった。ところが、社会局は銀協に対して、国民党の指導員を受け入れ、指導費を支払うことを要求し、さらに国民党上海市党部は、銀協の責任者が国民党に加わることを要求した。銀協がこれらの条件を拒絶したため、社会局は「会員数が法定人数に足りない」という口実で銀協の登録を受理せず、その代わりに、1947年1月、銀聯の登録を受理した。こうして国民党政権に慎重な対応をしながら合法的な社会团体となった銀聯は規模を拡大していき、日中戦争終結前夜の1945年5月には、193店の銀行・錢莊・信託公司・両替店から5300人の会員を集めていたが、48年1月までには、241店から1万3560人を集めるまでに成長した⁽¹⁵⁾。

ほかに、益友社の戦後の運営状況は、詳細な史料が欠如しているため不明であるが、趙樸初や張菊生といった人物が戦前・戦時から戦後にも継続して理事を務めて

(14) 王志莘「商業教育存廃問題」、『教育与職業』90, 1927年11月。

(15) 『上海“銀聯”十三年』, 56～60, 64頁。

いることから⁽¹⁶⁾、銀聯の場合と同様、国民党による統制の影響を保聯・洋聯の場合ほど強く受けなかったのではないかと考えられる。

二、娯楽による社会批判

以上で見たように、戦後の聯誼会は、会の内部に多くの国民党員を組み入れ、それ以前の租界当局や傀儡政権に対してよりも、戦後の国民党政権に対しては慎重に対応した。しかし、聯誼会が主催する実際の娯楽の場面においては、国民党統治下の社会を痛烈に批判する活動が、活発に展開された。そこでは、戦前・戦時期において「抗日」や「救国」を掲げた大衆運動の経験が生かされたといえる。本節では、各聯誼会が戦後に盛行した歌唱・ダンス・話劇・京劇の活動について見ていきたい。

まず、歌唱について見ると、戦後の聯誼会では第一に、国民党統治下の社会を風刺する歌曲が合唱された。例えば、『茶館小調』は、戦時に国民党統治下にあった西南地方のある茶館で、いざこざを避けるために「国事を語ることなかれ」という貼り紙をしたが、客がそれに憤慨するという対話から、国民党統治下の言論の不自由を暴露した。同じく言論統制を題材にした『古怪歌』は、「早朝城内に行くと犬が人を咬むのを見る！ 彼らがワンワンと吠えるのだけを許して、どうして人が口を使って話すのを許さないのか」と歌った。また、『你這個壞東西』は、買いだめと売り惜しみをして利を図り、空売買・投機取引をし、物価をつり上げる商人を恨んだ歌曲で、『五塊錢』は、「なぜ五元札を欲しが人はいないのか？ なぜ五元札はあたり一面に捨てられるのか？ なぜだ？ なぜだ？」と歌い、インフレを風刺した。

第二に、「戦闘歌曲」といわれるものが歌われた。例えば、『つまずき倒れることが何だ』、『入獄することが何だ』、『団結こそが力である』、『一人が倒れれば千万の人々が立ち上がってくる』と題する歌曲や、「自らの刀と剣を持ち上げて敵の騒乱を制止し、我々の民族の自由・解放を争い取り戻そう」と歌う『自由神』などがあった。これらの歌曲の一部は、学生たちの間から伝わったもので、学生運動によって逮捕者が出ると銀聯でも合唱された。また第三には、地方の風光や民情を賛美する民間歌謡が歌われた。例えば、「山のあそこはよいところ、貧乏人も金持ちもみな

(16) 『益友社十二年』、15～16頁。

同じ、飯を食いたければ仕事をしなくてはならない、誰も君のために家畜を飼わない、一般庶民が村を管理して、民主を講じ地方を愛す」と歌う『好地方』が代表例である。ほかにも陝北民謡の『蘭花花』や『黄河大合唱』などが歌われたが、これらの歌曲には、共産党の統治区を賛美する政治的な意味合いがあった。このほかにも、『卒業歌』や『義勇軍行進曲』などの抗日救国の歌曲や、ソ連の歌曲、ロシアの民間歌謡なども合唱されることがあった⁽¹⁷⁾。

戦後内戦期において各聯誼会の合唱隊は、「愛国」や「民主」を求める大衆運動に積極的に参加した。1945年12月、昆明で内戦反対のデモを行った学生を国民党の軍隊が鎮圧する昆明惨案が発生すると、益友社の合唱隊は上海の玉仏寺で開催された追悼会と南京路でのデモ行進に加わった。1946年6月、南京の国民政府に和平の請願に行く馬叙倫・盛丕華（上海総商会会董等、民主建国会に参加）・閻宝航（重慶経済委員会委員等、37年に共産党入党）らの歓送会が上海で催されると、益友社の合唱隊も参加し、『十五日だよ、十五日』（内戦停止がわずか15日間であったこと）を歌った。また、1947年2月、上海の百貨店従業員による国産品愛用・アメリカ製品ボイコット運動委員会成立大会が国民党特務機関に襲撃された勸工大楼事件が発生すると、「新音楽運動」を推進していた黎明合唱団の周一丁は、『国産品を愛用するのが罪になる』という歌曲を創作し、益友社の合唱隊に提供した。そして、1947年夏、聶耳の十一回忌には、益友社・銀聯・華聯・立信会計学校などの合唱隊が蘭心大戲院を借りて音楽演奏会を挙行し、『我が愛する大中華』や蒋介石を批判する『東方の暴君』を歌った⁽¹⁸⁾。

次に、ダンスについて見てみよう。保聯では1947年6月、銀聯では同年9月にダンス班が成立し、ほかに益友社でも戦後にはダンスが盛行された。聯誼会は第一に、国民党統治下の社会を風刺した小歌劇の公演を行った。例えば『買売』は、飢えに苦しむ母娘3人が、年長の娘を売ることを決めたが、幾つかの大餅を買うくらいのお金しか手に入らないという話である。『恩恵』は、屠殺夫に1匹の犬が殺されたが、同じ群れのほかの犬たちは悲しまず、ただ殺された犬の妻だけが夫の仇をとって屠殺夫を殺した。しかし群れの犬たちは、その屠殺夫が仲間の犬の骨を餌にして

(17) 『上海“銀聯”十三年』、146～154頁。

(18) 『上海“銀聯”十三年』、153頁、『益友社十二年』、83～84頁。

与えてくれた恩恵に報いるために、屠殺夫の墓をつくった。妻の犬は群れの仲間
心を痛め、屠殺夫を恨み、その「恩恵者」の墓碑を倒して、夫の遺体の傍らで泣き
崩れるという話であった。第二に、農村での労働を題材にした小歌劇も盛んに上演
された。例えば、力を合わせて団結し荒れ地を開墾する『山上荒地』、つらい農業
労働を象徴する『農作舞』、牛の群れを放牧する牧童が笛を吹くときれいな娘がやっ
てきて牛といっしょに踊る『牧童短笛』、陝北地方を舞台にする『兄妹開荒』、解放
を迎えることを象徴する『冬亡春来』などがあった。これらは「進歩」的なダンス
とされ、共産党の統治を賛美する政治的な意味合いが含まれた。また第三には、少
数民族のダンスが「健康」的であるとして奨励され、例えば『瑶人鼓舞』（雲南・
貴州一帯の瑶族の祭礼）、『新疆舞』、『西藏舞』などが上演された⁽¹⁹⁾。

こうしたダンスおよび小歌劇が上海の人々の間でどのくらい人気を博したのかは
定かではないが、これらに対して国民党政権が圧力を加えることがあった。例えば、
人民共和国成立前夜には、「大上海青年戡乱隊」のメンバーで「小広東」と名乗る
レストランの店員が、ごろつきを集めて益友社のダンス班の活動を妨害しにやって
きた。また1949年3月、上海の八仙橋の青年会礼堂で益友社が「音楽とダンスの夕
べ」というイベントを開催し、『都市風光』を上演したが、上海市政府社会局の調
査員が監視に来た。小歌劇『都市風光』は、上海の下層社会に生きる乞食・娼婦・
人力車夫・ごろつき・貧乏学生などの矛盾を描き出した作品であったが、やむをえ
ず臨時に演目を変更し、彼らが帰ると上演を再開するという方法で、監視を切り抜
けた⁽²⁰⁾。

ところで、話劇が戦後内戦期にも俸給生活者たちによって盛んに上演された。例
えば、1945年10月、益友社の戦勝を祝う大会では、話劇サークルが抗戦喜劇『奨状』
を上演した。また、翌年新春の益友社の親睦会では、結婚における拝金主義の問題
を風刺した『装腔作勢〔みえをはる〕』が上演された。そのほかにも、益友社の話
劇サークルは、曹禺『日の出』、チェーホフ『求婚』などの上演を行った⁽²¹⁾。さら
に各聯誼会は、国民党統治下の社会を批判する話劇も上演し、それらは国民党によ

(19) 『上海“銀聯”十三年』、155～161頁。

(20) 『益友社十二年』、87～89頁。ちなみに、この時に娼婦役を演じた徐志（共産党員、
女性）は、文革の際にその写真を材料に迫害されたという。

(21) 『益友社十二年』、89～93頁。

る妨害や弾圧の対象となった。例えば、銀聯は1946年5月、育才学校で文芸娯楽の夕べを開催し、金城銀行の話劇サークルは、「敵産」を接收する際の国民党高官の不正を描いた『接收大員』を上演した。ところが、上演中の舞台に「共匪、即刻この劇の上演を停止しろ、さもないとお前たちに不利なことがある」と書かれた紙が投げ込まれ、さらに大声で国民党の歌曲を歌って上演を妨害する事件が起こった。また1948年5月には、銀聯が事務所拡張の経費を集めるため、上海戯劇学校を借りて、国民党統治下の北平の暗部を描く『小人物狂想曲』を上演した。ところが上演終了後、「この劇は共産党が舞台裏で指揮しており、席德基がその舞台裏の人物だ」として、銀聯の娯楽委員会秘書の席德基（共産党地下黨員）に対する個人攻撃がなされた⁽²²⁾。ほかにも、保聯・保進では、国民党員の羅北辰が理事長になってから、話劇サークルの上演する脚本を審査し始め、例えば夏衍編『芳草天涯』の上演は許されなかった⁽²³⁾。

話劇に対する統制が厳しくなると、それに代わって政治色の少ない京劇（「平劇」）が活発に上演された。特に保進では、戦後に重慶から上海に来た中興保険公司總經理の謝峻声が、戦時から羅北辰と付き合いがあり、さらに夫人がたいへんな京劇好きであったことから、平劇委員会の名誉主任に就任した。そのため京劇が盛行をみることになり、1948年9月18日、中国保険業界の最長老で中国保険公司總經理の過福雲の78歳の誕生日と保険事業に従事して60周年を祝う会が、保進・全国保険公会联合会・上海市保険業同業公会の3団体によって盛大に挙行されると、保進は、『武家坡』、『坐官』、『春秋配』、『穆柯寨』、『水淹七軍』といった京劇を上演した。そして、当日の入場料は換金された過福雲への贈り物と合わせて、「過福雲子女教育基金」を設立するのに役立てられた⁽²⁴⁾。

三、俸給生活者層の1949年

1949年に入り、人民解放軍の上海への進軍が間近に迫ると、上海の俸給生活者層は2つの組織を発起した。第一に挙げられるのは、上海職業界協会（以下では「職

(22) 『上海“銀聯”十三年』、130～131頁。

(23) 『上海市保険業職工運動史料』、111頁。

(24) 同前、119～120頁。

協) であり、それは2月に共産党の地下党組織が組織した上海市人民団体聯合会の下に発足された。職協は、主要目的として「上海の各業の職員を団結し共同の利益を保護し、自身および民衆の解放を勝ちとる」ことを掲げ、その具体的な工作として、「①隊伍を拡大し、覚醒を高め、各階層の人民を団結して真の和平を勝ち取り、解放を迎える、②戦犯を調査・監視し、その罪行の証拠を集める、③国营企業すなわち官僚資本主義の企業を調査し、破壊や移転を防ぎ、接收・管理を幫助する、④工商企業を保護し、職員・労働者の生活を保障し、労働者と資本家を合作させ、共同で対処する、⑤生産技術を学習し、工商政策を研究し、新民主主義の経済を建設する人材を培養する」ことを挙げた⁽²⁵⁾。そして、実際に上海の地域社会で職協が力を発揮したのは、文書を配布して共産党の都市政策や工商政策を宣伝し、共産党統治区の人々の「新生活」を紹介し、さらに民衆を教化して企業組織を維持させると同時に、闘争の情緒を芽生えさせることにおいてであったという⁽²⁶⁾。1949年の2～5月にかけて、銀聯・華聯・保聯・益友社などの聯誼会の会員の一部も、職協に加わって活動した⁽²⁷⁾。

第二には、同じく共産党の地下党員が活躍して組織した人民保安隊が挙げられ、それは「職員の積極分子の武装組織」であった。人民保安隊の任務として、「①商店・棧房（運送業や宿屋の倉庫）・倉庫を保護し、物資の移転に反対する、②職員・労働者のリーダーを保護し、労働組合（「職工会」）を組織する際に協力する、③戦犯・特務、土地の与太者やごろつきを調査・監視し、解放の時に解放軍を幫助してそれらを逮捕する、④反動の武力を瓦解させ、門衛警官・保安警官・義勇警官・警察士官を奪還し、人力・物力・火力を含む敵の反動武装勢力を人民に服務する力に変える、⑤解放軍に協力し、上海を解放し、地方の治安を維持し、群衆の利益を増やし、人民の損失を減らす」の5点を規定し、さらに「①人民のために服務し、職員・労働者の利益を増やす、②命令に服従し指揮に従う、③義に勇み、団結して助け合う」という3条の規律を定めた。上海の人民保安隊は、1949年4月21日に人民解放軍が長江を渡って南京に入ってから、5月25日に上海の市街地に入って国民党

(25) 『益友社十二年』、113～114頁。

(26) 『上海市保険業職工運動史料』、29頁。

(27) 『上海“銀聯”十三年』、73頁、『華聯同楽会与上海外商企業職工運動簡史』、56頁など。

軍と交戦し占領するまでの期間、地域の治安維持のために活発な活動を展開した⁽²⁸⁾。人民保安隊には、保進の会員を含む40人あまりの保険業者が加わり、華聯の会員と合流して人民保安隊「華聯中隊」を結成し⁽²⁹⁾、銀聯の会員も人民保安隊の一中隊を組織した⁽³⁰⁾。また、益友社の社員が「益友区隊」として人民保安隊にもっとも積極的に参加し、4月20日までにその数は1000人あまりに達していたという⁽³¹⁾。

以上のように、職協と人民保安隊に加わった企業職員は、国民党から共産党への統治権力の交代期において、上海地域の秩序を維持し、混乱を最小限に止めることに貢献した。その際、一部の企業職員は聯誼会の会員として人民保安隊に参加し、聯誼会で職員動員の経験を積んだ共産党地下党員は、職協や人民保安隊の組織で中心的な役割を果たした。

さらに、保険業界で活動していた共産党の地下党員は、人民解放軍の上海進駐に際して、注目すべき特殊な任務を請け負った。1949年1月に共産党は、上海から逃避する国民党系・外資系企業の資産に関する資料を収集するように指令を発した。保険業界の地下党員は、営業上の必要から集めた企業の建物・倉庫・財産等に関する情報を記したカードや、火災保険業務用の上海市街地図を共産党に提供した。特に、保険会社の市街地図は、建物や道路が詳細に記されているので軍事的な利用価値が高かったばかりではなく、国民党や欧米企業の資産が記載されているので接収工作の参考になった。そのため、太平保険会社の市街地図が、共産党員による再測量と校正を経て、共産党と人民解放軍の手に渡った。

そして1949年7月、「解放」祝賀デモが挙行されると、益友社の社員の一部は、人民保安隊のなかに100人あまりの人民宣伝隊を組織し、白地に赤字の腕章を付けて、南京路・西藏路などで『解放区の天』、『君は灯台だ』、『東方紅』などの革命歌曲を歌い、田植え踊り（「種歌舞」）を踊り、腰鼓（腰に結びつけて左右から打つ小太鼓）や蓮湘（湖南のはすの実でつくった鳴り物）を打ち鳴らして行進し、共産党の宣伝に一役買った。その後、益友社の合唱隊・ダンス隊・話劇団のメンバーは、上海市工人文化宮业余文工団に編入され、ほかの団体や企業のために歌唱・ダンス・

(28) 『上海市保険業職工運動史料』、80頁、『益友社十二年』、114～115頁。

(29) 『上海市保険業職工運動史料』、80頁。

(30) 『上海“銀聯”十三年』、73頁。

(31) 『益友社十二年』、114頁。

演劇を訓練する業務についた⁽³²⁾。

ところで、すでに戦後内戦期から、各企業内で職員と労働者を統合した労働組合が組織されることがあったが⁽³³⁾、1949年2月には、共産党の組織改編の過程で、上海で企業職員層の動員を任務としてきた職員運動委員会が解散された⁽³⁴⁾。さらに「職員は労働者の特殊な一部」という認識が広まり⁽³⁵⁾、各聯誼会の企業職員は労働者と合同の労働組合に吸収されていった。1949年中頃には銀錢業工会・保険業工会、12月には上海金融工会が成立し、銀聯や保進の会員が合流した。また、益友社の社員や華聯の会員も、各業種別の労働組合（「店員工会」や「行業工会」など）の活動に合流した⁽³⁶⁾。

なお、各聯誼会の運営に携わった業界有力者や共産党地下党員のなかには、人民共和国成立後の上海や華東地区の実業界において要職についた人物がいた。例えば、戦時に銀聯・華聯の名誉理事、戦後に銀聯の理事長を務めた王志莘は、上海市工商業聯合会（以下では市工商聯）の法規委员会主任、華東軍政委員会財政經濟委員会委員など、戦時に銀聯・益友社の名誉理事、戦後に銀聯の副理事長を務めた孫瑞璜は、市工商聯の稅務委員会副主任、中国人民銀行上海市分行副行長など、戦時に華聯・保聯の名誉理事を務めた陳已生は、市工商聯の組織委员会主任、華東軍政委員会委員、華東行政委員会委員などを務めた。戦時・戦後に益友社の名誉理事・監事を務めた葛維庵は、市工商聯の常務委員などに就任した。ほかにも、保聯の発起人の一人である謝寿天は、人民解放軍が上海に入った当初、上海市軍事管理委員会の金融処副処長として活躍し、後には市工商聯の執行委員にも加わって活躍した。また、戦時に洋聯で活躍した地下党員の石志昂は、市工商聯の常務委員、中国進出口公司華東区公司の經理等に就任した⁽³⁷⁾。

(32) 《上海工商社團志》編纂委員会編『上海工商社團志』，上海社会科学院出版社，2001年，603頁。『上海店員和職員運動史』，307～309頁。

(33) 『華聯同樂会与上海外商企業職工運動簡史』，12頁。

(34) 中共上海市委組織部他編『中国共産党上海市組織史資料』，上海人民出版社，1991年，305頁。

(35) 天津総工会籌委会「關於公營企業中加強職工團結及管理民主化討論提綱」，『天津日報』，1949年6月27日，『海光』13—7，1949年7月15日より重引。

(36) 『上海“銀聯”十三年』，75頁，『上海市保險業職工運動史料』，30頁。

(37) 『上海市保險業職工運動史料』，78～79頁，『上海市保險業職工運動史料（続集）』，44頁，《上海工商社團志》編纂委員会編『上海工商社團志』，400～401，449～452，602～603頁。

おわりに

戦後上海の俸給生活者たちの間でも、在華日本軍が降服して共通の敵を失うと、国民党と共産党の間の摩擦が次第に表面化していった。国民党の聯誼会内部に対する干渉は傀儡政権の時よりも強く、他方で共産党地下党員や左派系活動家も勢力を拡大して活発に活動したので、幾つかの聯誼会は国民党の社会統制と共産党の大衆運動が衝突する場となった。聯誼会の顔役や指導者をみると、戦時期に日本軍や傀儡政権に関わった一部の有力実業家が退いたのに代わって、戦後に重慶から上海にやって来た国民党系の有力実業家が中心的な役割を担うことがあった。しかし、多くの実業家や俸給生活者たちは、政争に直接巻き込まれないように慎重な配慮を示しながら聯誼会の活動に関わった。また聯誼会に加わった俸給生活者たちのなかには、戦前・戦時期における「抗日」「救国」運動の経験が生かし、歌唱・ダンス・演劇を通して国民党政権を批判する者がいた。そして、国民党から共産党への政権交代期には、俸給生活者の一部が聯誼会の組織を基盤に団結し、治安維持や新政権の宣伝に努め、俸給生活者層の大部分もその活動を追認して、上海の都市地域社会の秩序を守ったといえる。

ところで、往年の共産党地下党員が上海市委党史史料徵集委員会に集まって編纂した史料集に依拠して描き出した戦後上海の俸給生活者層の社会・文化活動は、どうしてもある種の偏向を免れず、いくらか修正を試みる必要があるだろう。そもそも聯誼会は、人民共和国成立後に「反動組織」として批判され⁽³⁸⁾、さらに文化大革命期には政治的な迫害の口実となったが⁽³⁹⁾、近年では往年の活動家によって「革命の青春」と回顧されたように⁽⁴⁰⁾、歴史的評価が変転してきた。そして、1980年代後

(38) 聯誼会が「反動組織」とされた原因として、傀儡政権や国民党政権のほかにも秘密結社と深く関わったことが挙げられる。林幸司「「解放」後の重慶における私営企業の接收過程—楊家、聚興誠銀行、中国共産党」、『アジア経済』44—12、2003年12月、注31を参照されたい。上海の各聯誼会と秘密結社との関わりについて詳しくは不明だが、銀聯の創設に杜月笙が賛助を示したことから（『華聯同樂会与上海外商企業職工運動簡史』、28、148～149頁）、青幫組織との関わりが推察される。

(39) 『益友社十二年』、36頁。陳祖恩・葉斌・李天綱『上海通史第11卷 当代政治』、上海人民出版社、1999年、278頁。

(40) 呉子平「「銀聯」初期活動的片断」、『上海“銀聯”十三年』、166頁。

半から始まった史料集編纂の最大の目的は、共産党の地下黨員を中心とする聯誼会の参加者が日本軍・傀儡政権および国民党政権に抵抗し、戦時・戦後期においても共産党に忠誠を尽くした愛国者であったことを証明して、文革などで貶められた人々の名誉を回復することにあったと考えられる。

それゆえ史料集では、聯誼会内部の主導権争いが、しばしば国民党の非国民党員・共産黨員に対する弾圧という構図で語られる。しかし実際には、戦時に高揚した民族感情に覆い隠されていた経営者・上層職員や中・下層職員間の活動方針をめぐる食い違いや利害対立に、国民党・共産党の両党が関与して俸給生活者層を掌握しようとしていたと考えられる。また、史料集で取り上げられた歌曲や演劇は、農村や少数民族およびロシアの民謡や踊りを除けば、国民党統治を批判し共産党統治を賛美するものがほとんどである。しかし実際には、聯誼会の俸給生活者が流行歌を歌い、社交を目的にダンスを踊り、通俗的な劇を上演することはもっと多かったと思われる。そして、史料集に登場する聯誼会の俸給生活者は、国民党政権に対して「愛国」「民主」を求めるデモや会合に積極的に参加し、共産党地下黨員が組織した協会や保安隊に加わって人民解放軍の上海進駐を助ける。しかし実際には、共産党の上海統治に不安をもち香港などに避難したくてもできず、消極的に共産党支配の現実を受け入れた俸給生活者も少なくなかったであろう。